

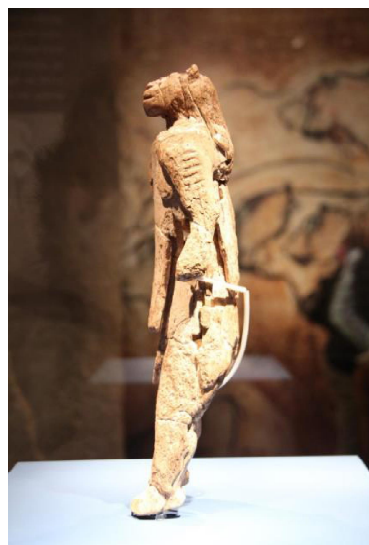
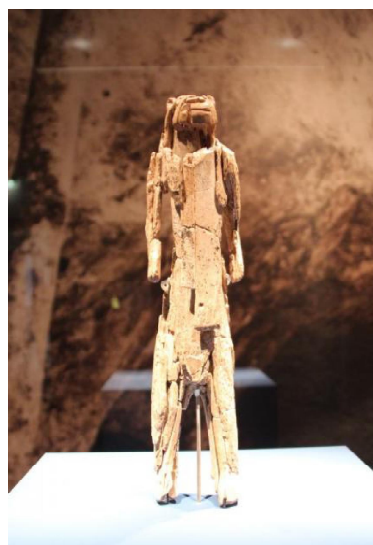
浄信寺通信

令和 2年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL (〇五二) 五六一一一七三六
頒布価格年 千三百円
(檀信徒会費)

人類の誕生と死生観

・科学と宗教のはざままで・



物理学者アルベルト・アインシュタイン生誕の地、南ドイツの人口12万人のドナウ河畔に開けた町ウルムに、数奇な運命をたどって修復されたマンモスの牙で作られた。高さ30cmほどの頭の部分はライオンで、体は背筋を伸ばして立つ人間の半人半獣像の【ライオン人間】と呼ばれている世界最古の彫像が、この町の博物館に展示されている。3万5000年ほど前に作られたこの彫像について、世界中の考古学者・人類学者・宗教学者によって、多くの論文が発表されている。

※写真引用 <https://www.ab-road.net/> 世界最古の彫像ライオン人間

七〇〇万年前 私たち人類(ホモ・サピエンス)の祖先と、チンパージーが、共通の祖先から分れて、アフリカ大陸で誕生した。この大陸で、二〇〇万年前、大きく脳を進化させ、直立歩行を完成させていた。人類は一八〇万年前、一部がアフリカ大陸を出て世界中に広がったとされる。七万年前のこの地球には、我々ヒトを含めて四種類の人類が存在していた(ネアンデルタール人と、インドネシアのフローレス島で化石が見つかったフローレス原人と、シベリアで化石が見つかったデニソワ人)。四万年前に、ネアンデルタール人が絶滅して、生き残ったのは、ホモ・サピエンスだけになってしまった。

近年の生物科学研究分野の技術の進歩には、目を見張るものがある。二〇一〇年、絶滅したネアンデルタール人と、現人類が交配していたと、両者のゲノム解析から明らかになったとの研究報告は、とりわけ衝撃的ニュースだった。

ヒトゲノムの三〇億個にも及ぶ塩基配列は、人であれば皆完全に一致するものではなく、個々の人のヒトゲノムの塩基配列を比較すると0.1%程度の違いがあることが知られてい

る。この塩基配列の違いが、顔かたち、性格などの違いは言うに及ばず、人の【生・老・病・死】の多様性につながるがっている。遺伝子DNAレベルで見れば、バナナですら、六〇%はヒトと同じと聞くととき、地球上のあらゆる生命体の進化・多様性・神秘性には驚くほかはないのである。

生命誕生の謎を解く鍵として、細菌類の仲間のシアノバクテリアの存在が、科学者の間では、有力な説に

平和公園墓参のご案内

日時：8月12日(水)

13日(木)

午前8時頃～午後1時頃

なっている。今から三十五億〜二十七億年前に大量発生して、光合成で生み出された酸素を、海水中に放出して、それまで酸素の無かった地球環境を激変させたと考えられている。

この光合成能力をもつシアノバクテリアが、他の細菌と共生的に合体することによって真核生物【注1】が生じ、植物の葉緑体となった言われている。これは、【細胞内共生説】と言われ、二〇一一年に亡くなったアメリカの女性生物学者リン・マーギュリスが一九七〇年に提唱した説である。

我々の体は、二五〇〜三〇〇種類、三七兆個にもおよぶ細胞からできている。その細胞の中には、ミトコンドリアと言われる別のDNAを持った小器官(生き物)が存在している。このミトコンドリアなくしては、ヒトは生きていられないのである。謂わばエイリアンと共生しているのである。

共生とは、異なる生物同士が、密接な関係を有して共に活動している現象を言い、消化器官(大腸・小腸)には、サプリのコーマーシャルでお馴染みの、ビフィズス菌や乳酸菌等の腸内細菌が、約一〇〇〇種・一〇〇兆

個も生息していることが知られている。その細菌を全部集めると、重さ数キログラムにもなる。同時にこうした有益な腸内細菌ばかりではなくて、現在はコロナウイルスで甚大な影響を全世界規模で被っている。一度は発症する水痘(水ぼうそう)は、水痘・帯状疱疹ウイルスの感染によって、全身の発疹や発熱、肺炎や細菌感染の合併、髄膜炎や脳炎など様々な症状をおこす。妊娠初期に水ぼうそうに感染すると、生まれてくる赤ちゃんに重篤な障害を及ぼす。病状が治ってもこのウイルスは、体内に潜伏して生き残り、小生も免疫が低下したり、ストレスを抱え込むと、帯状疱疹やヘルペスとして、体の表面に出てきて御挨拶をする厄介なウイルスである。その都度抗ウイルス剤のお世話になっているのである。

こうした人類の進化の過程と、我々人間のメカニズムを知るとき、そこには二千五百年前お釈迦さまが説かれた、無量無数の因縁によって、私を成り立たせている【縁起】の基本思想を思い出さずにはおられない。私だけの力で我々は生きていく事ではないのであって。恒沙(ガン

ジス川の砂の数)数知れない数の生き物が、我々の体内で、休む事なく生まれ・死を繰り返しているのである。ミトコンドリアや腸内細菌の力を借りずして、我々を一秒たりとも、いのちを繋ぐことは出来ないのである。これを【他力】と言わずして何と呼べばいいのか？うがった言いかたでは、阿弥陀様の他力だけが専売特許ではないと思うのである。

今から一九〇〇年ほど前の第十六代ローマ皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌスは「死は出生と同じく自然の神秘である」との言葉を残している。自坊の過去帳を見るとつい一〇〇年ほど前には、各年代偏りなく亡くなっている。特に公衆衛生の未発達時代の乳幼児の死亡者数の多さが目につく。年齢に関係なく、何があってもおかしくない時代即ち「老少不定」の時代から、文字通り「生↓老↓病↓死」の時代になってきている。死そのものが見えなくなっている時代である。大多数の日本人が「死生観」を喪失した時代と言っても過言でない。

そもそもこの「死生観」と言う語彙は、明治初期から終戦後まで生きて仏教学者の加藤咄堂氏の「死生観

―史的諸相と武士道の立場―1904年刊から使われ始められた新しい言葉である。それまでの日本人は、この言葉の代わりに何と表現していたのであろうか？「あの世」・「ご先祖さま」・「靈魂」・「お迎え」・「清め塩」等の今まで脈々と伝承してきた、各種葬送習俗儀礼の中に、その

世界(死生観)を見てきたのでないだろうか。かく申せば真宗教学の学者達は、親鸞は、先祖供養・迷信・俗信は否定された。だから真宗に於いては、お盆の特別な行事や、むかえ火や清め塩をしなくても良い。そうした常套フレーズがかえってくる。確かに親鸞や蓮如の言葉をどう解釈する云々。学問上の解釈では、それでも良いのかも知れないのだが、しかし宗祖親鸞聖人の解釈でも、お西は、宗派の教義として、極楽があり、死んだ後に阿弥陀仏に連れていってもらおう。お東は、明治以降の科学的な世界観に併合して、現世において我々は往生すると主張する。浅学非才な小生には、何故そうした違いが有るのか理解できない。最近、お東の小谷信千代氏が、「真宗の往生論」の中で親鸞聖人は、現世に極楽があるとはいっていない、死後極楽へ行くと言っていると、主張

され論争になつていと聞いて、明治以降の大谷派近代教学の担い手の先師の呪縛から解放された学者が出てきた証（あかし）かも知れない。

京都大学総長で、霊長類研究の第一人者の山極壽一氏は、「生物多様性の高いジャングルをゴリラと一緒に歩いているうちに、了解というものは、理解によつてもたらされるものではないということがわかりました。それは直感によつてもたらされるものなので、身体的感覚が非常に重要です」【注2】と述べられている。同じ遺伝子をもつ我々ホモ・サピエンスも例外ではないと思う。

前述したアウレリウスの言葉を借りるまでもなく、死は、自然現象であり、例外なく訪れる生理現象であるのだが、死と言うものを知識や理解では、なかなか了解できない。

雪の結晶を人工的に世界で初めて成功させ「雪は天から送られた手紙である」の明文句を残した、石川県片山津出身の中谷宇吉郎氏は「大自然という大海の中に論理という網を投げて引つ掛かってきたものが科学的成果で、大半の水は網目からはこぼれ落ちる」と述べられている。つまり

論理的に説明出来る科学的成果は限られていのである。近代人は、論理的な合理的科学的成果に裏打ちされた事象だけを信じて生きていゝ。不合理で不合理的な事象に対しては、完全否定して、「非科学的」と切り捨てて生きる事が、常識とされている。

宮城県を中心に在宅ホスピスに取り組み、三〇〇人以上を看取つてきた医療グループ「爽秋会」理事長で医師で、自身もがんで亡くなつた岡部 健氏の生前インタビュー記事が、ネットに掲載されていた。その中で、岡部医師は、東日本大震災の被災地で、お化けが出る話を多く聞いた体験を語つておられる。被災者が「幽霊が出てきて怖い」と医者に訴えても、幽霊等という非科学的な事案を、医者は、治療する術を持ち合わせていないので、合理的な枠の中から適当な精神疾患の病名を探しだしてきてラベリングするしかないのである。しかしこうした被災者が、お坊さんをお経をあげてもらおうと、幽霊は出なくなつた事例をあげられている。祈祷（お経）で（心の）病が治る。そんな合理性のない儀礼は、呪術・迷信であり、いか

がわしい宗教に過ぎないと、言い切る事が出来るのであろうか？岡部医師が、多くの被災者が、実際にお経によつて救われる姿・現実に直面して、「儀式儀礼は人間の心を穏やかにするために発生したと思えない。人は儀礼なしで生きられない動物なのだと思う」と確信を持つて言われている。その事は、前述した山極寿一氏のゴリラ・チンパジーの話に符合するのではなからうか。

この岡部健医師の意志を引き継いで、岡部医院で緩和医療専門医として活動されている、河原正典氏が、講演会で、「死」は、必ず訪れる「自然現象」であり。その過程として病気の延長として「死」を捉えると、異常現象として病気が闘う為に、患者に苦痛をとまなう過度の治療で、刀折れ、矢尽きて死を迎える事になつてしまう。異常現象である「病氣」と、自然現象である「死」を、明確に分離して考える必要性を強調されている。そして自然現象としての「死」は医療の対象ではない。強い苦痛を伴う異常な生理現象・痛み等の症状が、医療の対象である。「死」そのものは家族・介護職・地域社会・宗

教者とかにかえすべきなのではないかと、述べられている。

ハワイ大学で、日本の「日本往生極楽記」「続本朝往生伝」などの往生伝に興味を持たれ一九七五年来日して、京都大学で、死生学、宗教倫理を専門にされている宗教学者のカール・ベツカー教授が、興味深い事例を紹介されていた。

アメリカの宗教心理学者のデニス・クラス氏が来日され、日本の家庭に仏壇があり遺影が鴨居に飾られ、朝、出掛ける前に、リンを叩いて、「行ってきます」。帰れば同じく「只今」と仏壇に手を合わせて挨拶する。仏壇には、お水・御飯・お酒などが供えられている。そこには、亡くなつた両親・縁者の生き様・声・知識を、心に聞いて、それに基づいて生きるのが文明ではないだろうか。彼（デニス・クラス氏）はそれを、「continuing bonds(続く絆)」ボンドは接着剤の意味。心の中で、おじいさん、おばあちゃん、父ちゃんという生き方、アドバイス、心が聞ける貴重な資源であつて、知恵であつて、これを欧米人が、活かさないの

は損であると、日本人の習慣習俗を、羨望のまなざしを含めて驚嘆されていた事例を紹介されている。

東洋・西洋を問わず、大切な人を失えば、直ぐに人間の死は、自然現象であると了解・納得は出来ないのである。残された遺族に、事故や不幸が襲ったりする事例も少なくない。今では論理的に、ショックによる一過性免疫不全とか、精神的不統一による事故。あるいは鬱による自死。

現代では、色々説明は出来るのだが、そうしたスキル（能力・技術）を持ち合わせていなかった昔の日本人は、それを【崇】と、総称していたと思う。

カール・ベッカー教授は、「日本人の年忌法要・お盆行事・葬送習俗儀礼を通じて、親戚や友人が繰り返し集まり、故人に思いを抱き・冥福を祈ることで、心の整理、精神統一ができて、それによって昔でいう「祟」—今でいう「免疫低下」や、あるいは「鬱」などを避けられてきた。お墓やお仏壇などを通じて、ご先祖さまの知恵を借りることが、日本人の知恵の一つであって、儀式は単なる儀式ではなくて、非常に機能的な意味があった」と述べられている。そして欧米に

おいて、日本の年忌法要儀式にヒントを得て、亡き人を偲ぶパーティが親族・友人を招いて定期的開催されている事例を紹介されている。

別な言い方をすれば、日本人は、こうした儀式・儀礼を通じて「死生観」を体得・経験してきた。前述した岡部健医師が「人は儀礼なしで生きられない動物」と言われた言葉の重みを、改めて噛みしめてみる必要がある。

晩年の良寛さんが、四十歳年下の弟子入りした美しき尼僧の貞心に恋いをした。その彼女に送った、辞世とされる歌には

形見とて なにか残さん 春は花
山ほととぎす 秋はもみじ葉

命つきて、何も遺す物はないが、春は桜になって、夏はホトトギスの声になって、秋はもみじの葉になって、いつもあなたのおそばに（愛おしく）います。というような意味。

一七七四年、フランスのラポアジエによって発見され、後にPurkinjeのアルベルト・アインシュタインの相対性理論で補完された【質量不変の

法則】がある。つまり化学反応の際には反応する物質の全質量と生成する物質の全質量はまったく等しく反応の前後において物質の全質量は変わらないという法則である。

良寛がこの【質量不変の法則】を知っていたとは思われないのだが、火葬され、煙になって空中を漂い、灰になって、骨が残っても、質量は変わらない。煙は、やがて空気中に溶け込み、雲になり、雨になって地上に降りそそぐ、やがて骨は分解して地中の栄養素になり、植物を育む。その植物を、人間が食べる。そんな思いが込められた歌と思えてならないのである。

人は死んだらゴミになると、言った方があった。全部が無くなって消滅する訳ではないのである。亡き親族のみならず、前述したように、滅亡したネアンデルタール人のDNAが、今も我々の体の中に生き続けている。食卓の食べ物にも、数多のご先祖の一部が入っているに違いないのである。それを昔の人は、【魂】とか【靈魂】と称

したと考えれば、鎮魂供養とか、先祖供養を排斥・卑下する必要はないと思うのである。デニス・クラス氏をして、「人類にとつて非常に貴

修 勤 講 恩 報

令和 2年11月9日 (月)

午前10:00~

勤行・お説教・おとき

重なる資源、知恵である」と言わしめた日本人が伝承してきた葬儀 お盆 年忌法要等の儀礼・習俗を大切に次の世代に伝えたいものである、

注1・真核生物は、動物、植物、菌類、原生生物など、身体を構成する細胞の中に細胞核と呼ばれる細胞小器官を有する生物である。真核生物以外の生物は原核生物と呼ばれる。

注2・山極寿一・小原克博著「人類の起源、宗教の誕生」

編集後記

今年の寺報遅くなりました。少々難解で難しい課題を書きました。住職